

客員の會費

八拾錢
拾參圓參拾八錢
貳拾圓參拾貳錢
支田 金四拾參圓九拾四錢五厘

内譯

參拾九圓九拾七錢
參圓拾五錢五厘
四拾五錢
參拾七錢
差引殘高 金四拾壹圓四拾壹錢五厘

會費領收

四十五年度分
穂積 銀 富岡 きの 桑田 龍子 田北 よれ
宮川 芳子 栗崎 トキ 井淵 英 清水 俊尾
大村 都 村田 よしな 中村 芦子 三宅 よし
芦川 春子 鷺尾 幾子 岩崎 まつしま 成瀬 よし
大正二年度分
栗崎 トキ 大村 都 三宅 よし
外に客員安井哲子倉橋惣三兩先生より四十四年度分として金
四拾錢宛領收せり

交詢

●母校たより

茗溪橋畔秋漸く更けて風瑟につもる落葉に哀を吟じ居り候。さても歎きの狹霧深き暮秋のあはれは北海のほとり南國のはても御同様の事と存候。例に母校の消息を些御報道申上ぐべく候

○大正元年九月十日第二學期始業式舉行せられ候。悄然として講堂に集りし私共は上壇の間の白木の杉戸に更に悲みの念を添へ申候候。式終りて長井長義先生より女子の心得に關する御話を蒙り申候。御話の要領は櫻蔭會會報第三十二

號にのせられあり候

○天日光暗き九月十三日午前八時十五分より明治天皇奉悼式を舉行致し候。憂愁の色森陰の氣滿堂を罩め一同肅然として 陛下の尊影を拜し奉る裡に、校長は奉悼の辭を讀み給ひて「熱淚滂沱五内裂くるが如く殆ど情を成し難きを如何せん」と聲をこめたまふや式場遽に嗚咽の聲起る。奉悼の歌を唱へ奉るにも胸塞がりて聲は振へがらにて候ひき。式終りて吉田先生より陛下御盛徳の一端を拜承いたし候。これも櫻蔭會報第三十二號にかゝげられしものに候。

○星疎に弦月影淡き十三日の夜二重橋畔に謹みて御大喪儀を奉送いたし候。嗚呼大内山の松風の音、篝火の色、御發軔合圖の號砲、諸寺の鐘の音、御輻車の軋り「哀の極」の悲韻など深く胸底に刻まれし悲の印象は、いつの世にか消ゆることの候ふべき。斷腸の語もこの悲をあらはすにはあまりに平凡に候。

○十一月六日は畏くも 明治天皇陛下の百日祭に當り候へば、午後一時より講堂に參集西にむ

かひて遙拜いたし候。終りて校長より限りなき御坤徳を頌し給へる御話承り候へば更に深き哀痛の情新に涙と共に湧きいで申候。

○今年の秋の郊遊會はひかへ申候。然し文科二年の鎌倉史蹟しらべ、同二年二部の箱根研究、文科並に技藝科三年の日光旅行は見學の爲め止むを得ず夫々目的を達し申候。姉君達の御思ひ出や如何に。

○十一月九日本校職員生徒一同は滿腔の熱誠と喜悅とを以て、奈良女子高等師範學校の旅行團を歓迎いたし候。御慰にもと豫て企圖せし本校獨特の餘興はこの折柄畫餅に歸し候ひしも、電燈の光炫き大講堂に相會し、兩校長をはじめ兩校生徒總代の親善懇篤なる挨拶を換されし時はさすがに姉校よ妹校よと互に握手したる心地いたし、不思議なるばかり懐かしき情湧き出で申候。食堂の入口には Well come の金文字八つ手の縁に映えてうつくしく、會食中の談笑はポリホンの妙音に一しは興を添へ申候。夜は再び講堂に知己相集りて盡させぬ物語に舊情を温め、